ビフレステックTGA-1B1タマゴ型スピーカに焦点を絞った

新 忠篤

WE350B

シングル・ステレオ・パワー・アンプの製作(2)

先月号に書いたWE350Bシングル・アンプはひずみが多く失敗に終わった．これはビフレステックTGA-1B1が一般のスピーカに較べて，アンプのひずみに対して敏感に反応するのではないかと考えた．そこでWE350Bを入力トランスだけの単段で鳴らしてみることにした．

手元に2011年に製作した2A3シングル・アンプがあったのでこれをベースにした．

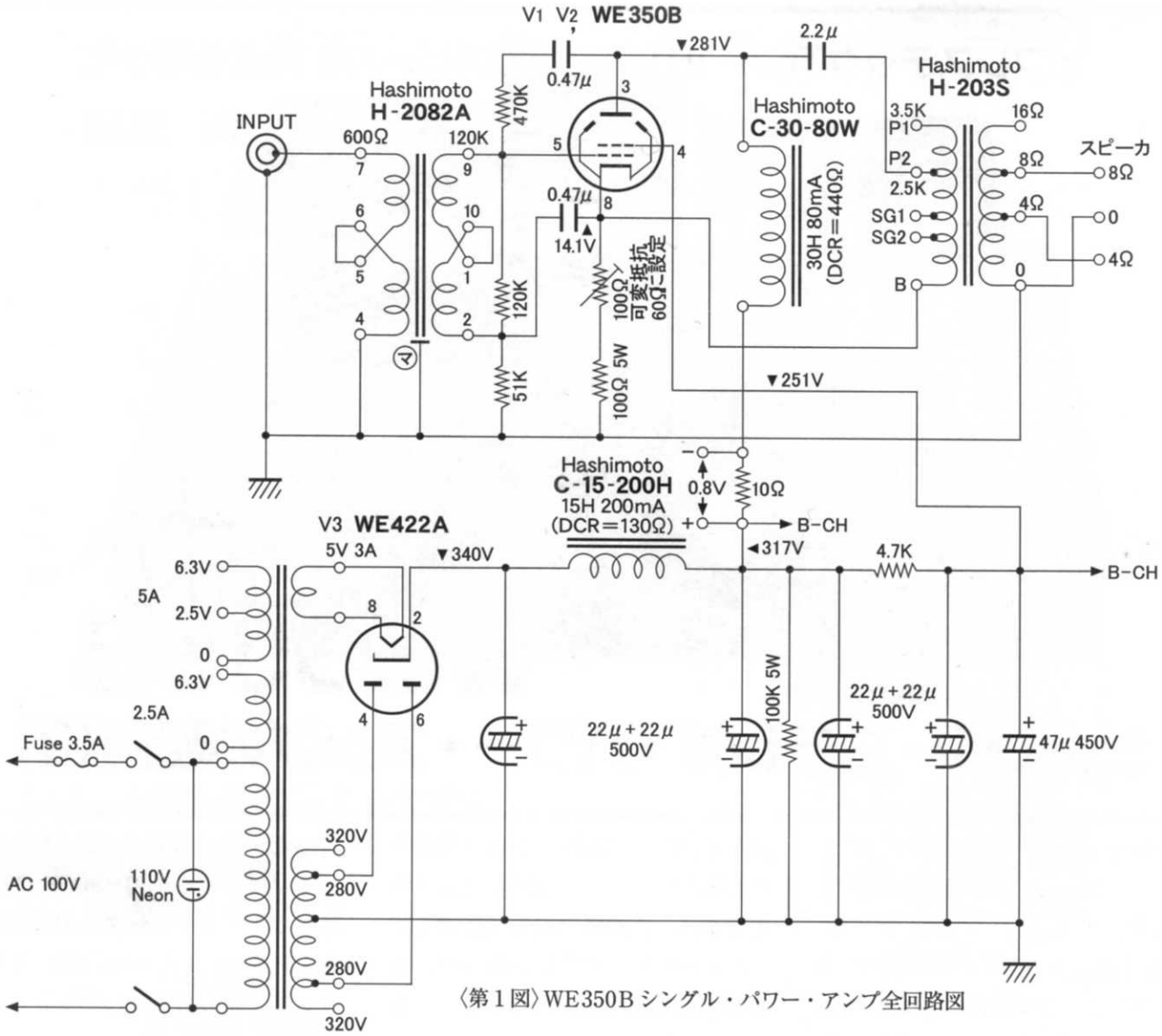
第1図が全回路図である．

入力トランスに1次600Ω，2次12k(巻線比1:14)の橋本電気H-2082Aを使用

この入力トランスを最初に使用したのは47シングル(2010年10月号)，次に2A3シングル(2011年10月号)，最新はEL34(UL)プッシュプル(2013年秋発売管球王国70号)でいずれも単段アンプである．メーカー発表の高域特性が10kHzで−2.2dB，20kHzで−5.5dBながら，私はその音質が気に入り，今回4度目の使用である．2次側の出力電圧は100VRMSをクリアしているので，もっと他にも使用法がありそうだ．特注品だが¥28,400(税別)は手頃だ．

出力段はC−30−80W(30H80mA)プレートチョークとH-203S(1次3.5−2.5k，2次16−8−4Ω)出力トランスを組み合わせたパラレルフィ

◆ウエスタンエレクトリック WE350Bの外観



〈第1図〉WE350B シングル・パワー・アンプ全回路図

◆2A3 シングルを改造．ソケットはすべて US の 8 ピン

◆「SAXOPHONE COLOSSUS」PRESTIGE LP 7079 のレーベル（A & B 面）

ることだった．先月製作した350Bシングルは4Wで第2次と第3次が入れ替わりそれ以上の出力では奇数調波が上回っていた．それは他のアンプでも同じ傾向である．このひずみ特性はアンプの音質と関係があるように感じた．

(2) 周波数特性（第3図）

20Hzが−5dB急激に落ちているのは出力トランスがエアギャップ入りのシングル用トランスのせいだと思う．これはかえって好都合で，不要な低域がスピーカに行かないからだ．高域は70kHzまで伸びているのはPFBの効果だろうか．入力トランスの裸特性を見るともっと早く減衰しているはずだ．

(3) 入・出力特性（第4図）

出力1Wに要する入力電圧が0.26Vで，最大出力7Wでは0.74Vで高感度．低感度スピーカTGA-1B1と組み合わせて使用できる．

試聴

本機の前にC3m単段ラインアンプ（2011年4月号掲載）を置いた．スピーカはビフレステックTGA-1B1タマゴ型スピーカである．丁度次回の講演で演奏予定のモノLPを選んでいるところだったので，ソニー・ロリンズのサキソフォン・コロッサス（PRESTIGELP7079）をかけてみた．最近はモノLPにもWestrex10Aを使用している．過去50年に使用したどのカートリッジより好ましいからだ．第1曲のST.THOMASは試聴に多く使用しているトラックのため，ほぼ未通針のその他の曲を順に聴いていった．

スタチックな風合いのTGA-1B1がこのアンプでまったく表情をかえた．立体感をもって吹き出してくるサックスはこれまでこのLPから聴いたことがないものだった．トミー・フラナガンのピアノもいつもの平板な表情とは異なり精気にあふれたものだった．さらに大きくかわったのはマックス・ローチのドラムスだった．この迫力は尋常ではないと鳴り方だった．ローチのシンバルの音がスット抜けるのは3調波ひずみに汚されないためだろう．調子に乗ってどんどん音量を上げたくなるが，やはり頭打ちのポイントがやってくる．それでも先月の6SN7-350Bよりずっと音の汚れが小さい．B面2曲目のBLUE SEVENで絶好調に達した．長いローチのドラムソロがこれほど歯切れよく聴こえたことはこれまでになかった．ハイハットシンバルの一撃につづくロリンズのソロで興奮の頂点に達した．

この録音は1956年6月22日，ニュージャージ州ハッケンサックのヴァン・ゲルダー・スタジオで録られたもの．ロリンズのモノラル録音の最後にあたるもので，これがステレオ録音でなくて本当に良かったと思う．こんなにシャープで感動的な音はステレオではおそらく録れなかったと思う．

久しぶりにジャズの醍醐味を味わった．

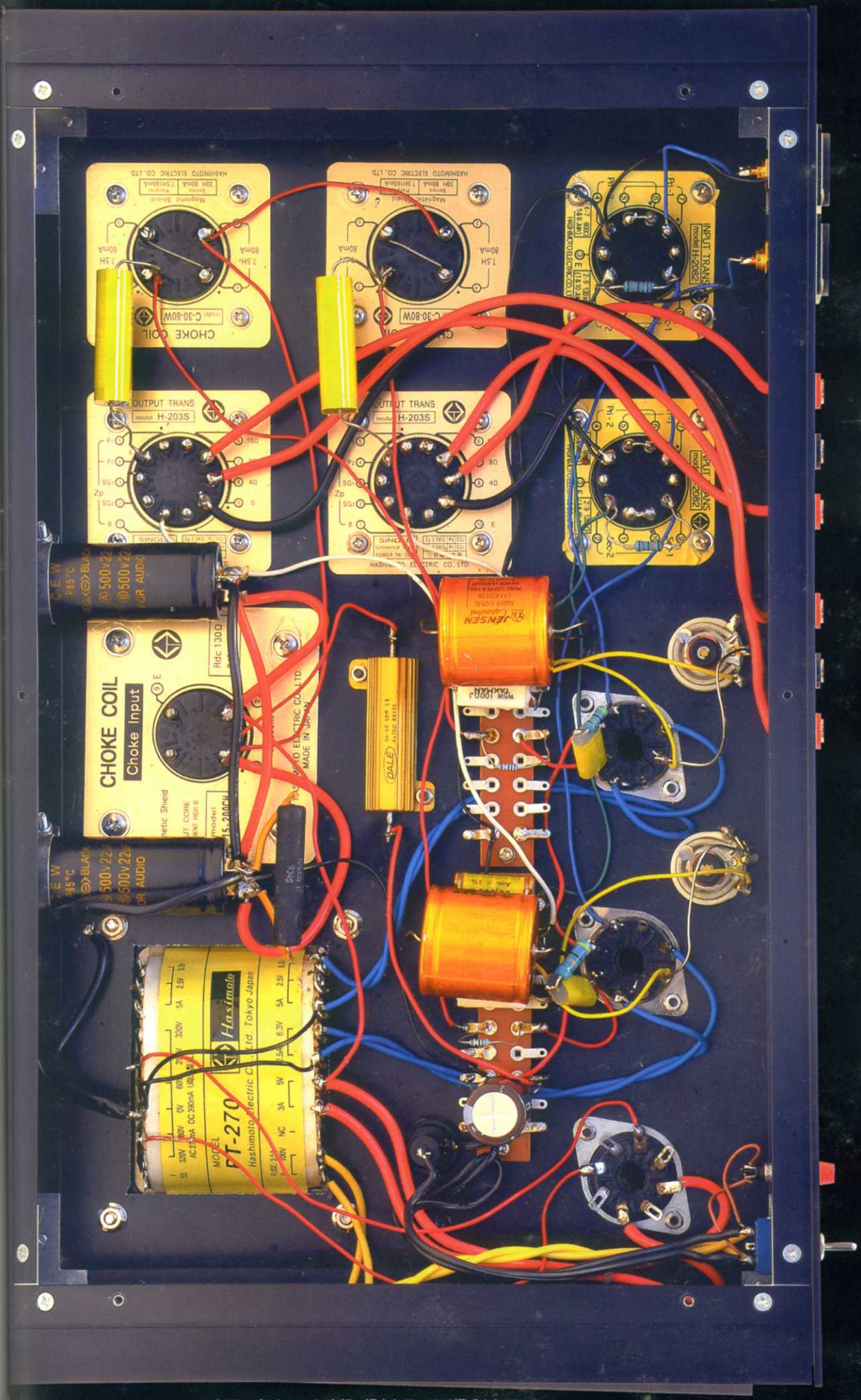
× ×

ピフレステックTGA-1B1タマゴ型スピーカに焦点を絞った

WE350B単段シングル・パワー・アンプの製作

製作★新 忠篤

●本文製作記事参照



◆アンプのシャーシ内部．橋本トランスで構成されている